

シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』の

ジェームズ朝的インターテクスチュアリティ

大島 久雄

シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』

1603年にエリザベス女王が亡くなり、スコットランドから迎えた新国王ジェームズにより国王一座付劇作家となったシェイクスピアは、以前に歴史劇執筆においてしばしば材源としていた『ホリンシェッド年代記』に向かった。波乱に満ちた王朝交代期に『リア王』や『マクベス』や『シンペリン』においてシェイクスピアがこの歴史書に向かった理由は何であろうか。劇37作中13作で材源となった『ホリンシェッド年代記』は、Holinshed Project (<http://english.nsms.ox.ac.uk/holinshed/>)により1577年版・1587年版ともにオンライン参照が可能となり、その歴史的・文化的価値が学際的に見直されてきた。¹ 本発表は、期待や不安を伴う時代の変わり目の言説環境における『リア王』の政治性に注目しながら、その主要材源『ホリンシェッド年代記』に焦点をあて劇のジェームズ朝的インターテクスチュアリティの分析を試みた。

インターテキストとしての『リア王の真実の年代史劇』

『リア王』執筆時にシェイクスピアが参考にしたとみなされている上記の作者不詳年代史劇(1594)は、女王一座が、同様に作者不詳の他の歴史劇とともに90年代に上演していたもので、台本は1605年版が現存し、ホリンシェッド年代記によるリア王に関する出来事を軸にフランス王が部下と変装してコーデイラの求愛に訪れるという喜劇的要素を加えてハッピー・エンディングの歴史ロマンスとして劇化している。² シェイクスピアの『リア王』は、クウォート版(1608)とフォリオ版(1623)があり、『年代史劇』と比較すると、タイトルにも国王一座付劇詩人シェイクスピアの名前が明示され、ダブル・プロットの複雑な悲劇構造にはレイト・ワークスの時期に入った作家性が発揮されている。政治性の観点でも『年代史劇』は、エリザベス女王時代に政治問題になっていた世継ぎ不在の危険性については触れているものの、国土分割や甘言への諫めは古典的教訓の域を出ていない。

パラレル・テキストとしての『ホリンシェッド年代記』と『リア王』

これらの歴史書と戯曲の古典が現在パラレル・テキストとして認知されるようになったことは興味深いことであり、それぞれ異なるテキストは、文学的にも政治的にもインターテキストとして興味深い関係(インターテクスチュアリティ)を示している。1533年にロンドンに移住したオランダ人書籍販売・印刷業者レイナー・ウルフは、全世界の歴史・地誌をまとめようとしたが叶わず、途方もない『ユニヴァーサル・コスモグラフィ』の企てはウルフ死後に助手ホリンシェッドが引き継いだ。彼は、残された膨大な資料をもとに、世界から地域を絞って複数の執筆者に依頼し、事業としての可能性に惹かれた書籍業者の支援により出版された。77年版は急いで出されたので不完全な部分も多く、ホリンシェッド亡き後、87年には新たな編集体制で執筆者をさらに加えて内容もその前年までにアップデートされた改訂版が出された。シェイクスピアが影響を受けている、マクベスが会おう魔女の絵など、初版の味わい深い挿絵が87年版でカットされたのは残念だが、リア王に関する記述は本質的に変更はない。シェイクスピアは、旧版も読んでいたが、新版をより多く参照していることが言語分析などから現在の定説になっている。

ジェームズと『ホリンシェッド年代記』

『リア王』上演5年前、ジェームズの英国王即位(1603)という支配体制の変化によって社会に流布する政治言説も一変したと考えられる。英国における新国王やその祖国スコットランドへの関心の高まりは、『バジリコン・ドーロン』(Edinburgh:1599; London: 1603)、『悪魔論』(Edinburgh:1597; London: 1603)などのジェームズの著書や、デンマークからジェームズ王妃が嫁入りした際の魔女災難とその裁判を報じた『スコットランドからの便り』(Edinburgh:1591; London: 1603)等のパンフレットの出版にも示されている。³ ジェームズは、イングランド・スコットランド・アイルランドに君臨するブリテン国の王を目指すが、それにより各地域の歴史や地誌にも注目が集まり、『ホリンシェッド年代記』はこの点で格好のガイドブックとなった。スコットランドから英国へと着任するジェームズや同伴の宮廷人にとっても本書は欠かせない英国情報源であり、ブリテン統合を支持する歴史的根拠もそこには含まれていた。統合の際には統合後の名称が問題となるが、実際

に統合のために名称が検討され、『ホリンシェッド年代記』にも記述があるトロイから逃れて建国したブルータスの名前にちなむブリテンという名前が主要候補として注目を集めた。ジェームズの英国王就任により統合が達成されたかのように一般に思いがちであるが、それは歴史的事実に反し、ちょうど『リア王』が上演された頃に統合の方針が議会にかけられて反対意見と直面し、ジェームズが夢見た統合が真に実現するのは18世紀に入ってからのことである。分断 vs 統合の政治対立の中において劇の政治性を考えることが重要である。

1608年のホワイトホール宮殿での御前上演は、この点で際立った重要な政治性を背景に実施されたとみなすことができ、シェイクスピアも少なからずこの点を意識していたと考えられる。『リア王』の冒頭は、国土分割という王の新たな考えに当惑する家臣達の戸惑いから始まり、舞台では伝統的に玉座に座るリア王が娘たちの愛情テストにより王位と国土を分割して悲劇が開始する。つまり御前公演で舞台に相対して玉座に座るジェームズは、だまし絵のように歪んではいないものの、あたかも鏡を見ているかのように、老王リアの愚かな行いを目撃することになる。この時、ジェームズには、三人の娘ではなく、二人の息子と一人の娘がいて、実際に子供達も他の宮廷人とともに同席していたと考えられている。リアの婿達と同様に、二人の息子は、コーンウォール公とオールバニー公の称号ももっていた。王だけではなく、息子・娘達もまるで自分の事のように劇を見た可能性があることは劇の政治的インパクトの強さをうかがわせ、もちろん現実と虚構を混同しないように劇作家は安全な距離を設けているが、三人の子供に国土を分割することの危険性に警鐘を鳴らしている。

歴史と検閲

世継ぎ不確定や国土分割による内乱の危険について君主に警告した前例としては、エリザベス女王御前公演として法学院で催され、英国初の悲劇としても知られている『ゴルボダック』(1561)がある。⁴ これも『リア王』と同様に神話的な初期英国史を取り上げ、作者の法学院学生達は同様の年代記に材源を見出した。ジェームズ自身も治世者が心すべき帝王学の例証として歴史を利用し、長子に捧げた王の贈り物である『バジリコン・ドーロン』において、三つの王国が父からイザクに譲られたことを神の意にかなう行為として称賛し、三人の子供たちに国土を分割し、国難を招くブリテン国建国者ブルータスの例を引いて分裂の危険性を諷めている。

Otherwayes by deuinding your kingdoms, yee shall leaue the seed of diuision and discord among your posteritie, as befaell to this Ile, by the diuision and assignment thereof, to the three sonnes of Brutus, Lochrine, Albanact, and Camber.

(綴りは原文のまま)

新アーデン版編者フォークスはジェームズがこの部分を『ホリンシェッド年代記』から引用したと推測しており、同年代記が強調するノアによる三人の息子への世界の三分割に始まる国土分割の悪しき連鎖についてもジェームズはよく理解していたであろう。⁵

実は女王治世に出版された『ホリンシェッド年代記』においてジェームズは“young prince”として登場し、母親のスコットランドのメアリーの没落に関する本書の記述に対して彼が不満を抱いていたことが公的文書に記録されている。エリザベス女王もジェームズに関する記述には神経をとがらせ、検閲の徹底と編者に強く修正を求めていた。『ホリンシェッド年代記』第2版には、女王後の時代を見据えた新編者による政治的忖度が垣間見え、87年出版は、それ以降になるとメアリー処刑(1587)も英国史・スコットランド史で取り上げる必要が生じ、そうなる出版認可そのものが下りなくなる可能性が高いギリギリのタイミングであった。このような自主検閲は『リア王』のQ・F版の相違に関しても指摘されている。以上、『リア王』インターテキストチュアリティ分析より、国王一座付劇詩人として検閲も想定内であったシェイクスピアが、『ホリンシェッド年代記』を再び劇作に取り上げたことは、円熟期劇作家の能力は言うまでもなく、彼の政治的慧眼の賜物であったと言えるであろう。

註

1. Kewes, Paulina et al. *The Oxford Handbook of Holinshed's Chronicles* (Oxford, 2013).
2. *The True Chronicle History of King Leir* (1605: Kessinger Legacy Reprints, 2010).
3. James I. *Basilicon Doron* (1599; Scolar Press, 1969); Tyson, Donald, ed. *The Demonology of King James I including News from Scotland* (Llewellyn, 2011).
4. Thomas Norton & Thomas Sackville, *Gorboduc, or Ferrex and Porrex* (University of Nebraska Press, 1970).
5. Foakes, R. A., ed. *The Arden Shakespeare: King Lear* (1997; Bloomsbury, 2015).